

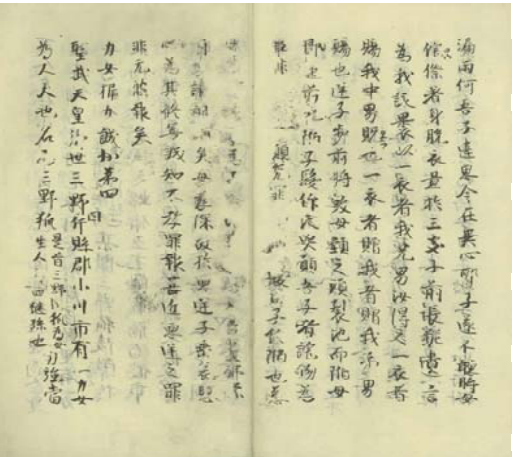
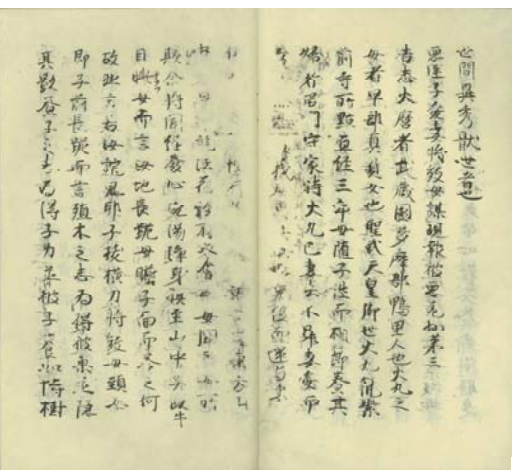
# 失われた文字を求めて

妻からの手紙が残っていれば、此の事件の顛末は方向性を変えていたかもしれません。ですが、悪逆の天罰を受けたのは彼一人です。そして、生き残った母刀自は、もつと苦悶することとなります。故郷に子の遺髪を持ち帰った母とその子火麻呂の妻との関係はどうなったのでしょうか？妻については何も語られていないのです。そこで、個人の感情を伝える奈良時代の文字言語である手紙・書簡がどのようなものであったのかを知る手がかりが必要となつてきます。(巻末にこの文章を「茶釜」により、語彙形態解析をした資料を付載しました)

〔用例〕『日本靈異記』中巻・大系本一七九〜一八三頁、日本古典全集一五〇〜一五三頁に、

悪逆子愛妻將殺母謀現報被惡死縁、第三

吉志火麻呂者、武藏國多麻郡鴨里人也。火麻呂之母者、日下部眞召也。聖武天皇御世、火麻呂、大伴姓名不分明筑紫前守所點。應經三年。母隨子往而相節養。其婦者留國守家。時火麻呂、離己妻去、不昇妻愛而發逆謀、思殺我母、遭其喪服、免役而還、與妻俱居。母之自性、行善爲心。子語母言、東方山中、七日奉説法花經有大會。率母聞之。母所欺念將聞經、發心洗湯淨身、俱至山中。以牛目一眦母而言、汝地長跪、母、瞻子面一答之曰、何故然言、若汝託鬼耶、子、拔橫刀將殺母、々、即子前長跪而言殖木之志、爲下得彼菓一並隱中其影上、養子之志、爲下得子力一并被子養上、如侍樹漏雨、何吾子違思今在異心一耶、子遂不聽、時母侘條、著身脱衣置於三處、子前長跪、遺言而言、爲我詠裏、以一衣者我兄男、汝得之也、一衣者、贈我中男一貺也、一衣者贈我弟男一貺也、逆子步前、將殺母項之、裂地而陷母即起前、抱陷子髮、仰天哭願、吾子者託物爲事非實現心、願免罪貺、猶取髮留子、々終陷也、慈母、持髮歸家、爲子備法事、其髮入篋置佛像前謹請諷誦矣、母慈深、深故於惡逆子垂哀愍心、爲其修善、誠知不孝罪報甚近。惡逆之罪非無無彼報一矣



悪逆の子、妻を愛し、母を殺さ將と謀り、現に悪死を被る縁△第三

吉志火麻呂は、武藏の國多麻の郡鴨の里の人なり。火麻呂の母は、日下部眞召なり。聖武天皇の御世に、火麻呂、大伴姓名分明ならず筑紫の前守に點されて、三年を経應かりけり。母は子に隨ひて往きて、相節ひ養しき。其の婦は國に留まりて家を守る。時に

愛に昇へずして逆なる謀を發し、我が母を殺し、其の喪に遭ひて服し、役を免れて還り、妻と俱に居むと思ふ。母の自性、善を行ふを心とす。子、母に語りて言はく「東の方の山の中に、七日法花經を説き奉る大會有り。率、母よ、聞かむ」といふ。母欺かれ經を聞かむと念ひ、心を發し、湯に洗ひ身を淨め、俱に山の中に至る。子、牛の目を以て母を眦ひて言はく「汝、地に長跪け」といふ。母、子の面を瞻りて答へて曰はく「何の故にか然言ふ、若し汝鬼に託へるや」といふ。子、横刀を抜きて母を殺らむとす。母、即ち子の前に長跪きて言はく「木を殖うる志は、彼の菓を得、並びに其の影に隠れむが爲なり。子を養ふ志は、子の力を得て、

併せて子の養ひを被らむが爲なり。特めし樹に雨漏るが如く、何ぞ吾が子、思ひに違ひて今異しき心在る」といふ。子遂に聴かず。時に母佗僚ビテ、身に著たる衣を脱ぎて三處に置き、子の前に長跪き、遺言して言はく「我が爲に詠ひ哀れ。以て、一つの衣は、我が兄の男、汝得よ、一つの衣は、我が中の男に贈り賜へ、一つの衣は我が弟の男に贈り賜へ」といふ。逆なる子歩み前みて、母の項を殺らむとするに、地裂けて陥ル。母即ち起ちて前み、陥る子の髪を抱き、天を仰ぎて哭き願はくは「吾が子は物に託ひて事を爲す。實の現し心に非ず。願はくは罪を免し賜へ」といふ。猶し髪を取りて子を留むれども、子終に陥る。慈母、髪を持ちて家に歸り、子の爲に法事を備け、其の髪を管に入れて佛像の前に置き、謹みて諷誦を請ふ。母の慈は深し。深きが故に、悪逆の子に哀愍の心を垂れ、其の爲に善を修す。誠に知る、不孝の罪報は甚だ近く、悪逆の罪は彼の報无くは非ざることを。

節 <small>加ヒ</small>	眦 <small>ニラ</small>	率 <small>イ</small>	佗僚 <small>二含ヲ</small>	陥 <small>ヲチ</small>	賜 <small>給</small>
岐	ム	サ	ヒテ	イル	也

火麻呂夫婦の「書簡Ⅱ手紙・消息」も、いまだ推理小説のような迷宮のなかにあります。

## 心の手紙・書簡

同じく『万葉集』巻十八に生活の記録とも言える手紙・書簡が収載されています。これを次に見てみたいと思います。

### 越前国掾大伴宿禰池主の来贈する歌三首

以今月十四日、	今月十四日をもちて、
到来深見村、	深見の村に到来し、
望拜彼北方。	彼の北方を望拜す。
常念芳徳、	常に芳徳を思ふこと、
何日能休。	いづれの日にかよく休まむ。
兼以隣近、	兼ねて隣近なるをもちて、
忽増恋緒。	忽ちに恋を増す。
加之先書云、	しかのみにあらず、先の書に云はく、
暮春可惜、	暮春惜しむべし、
促膝末期。	膝をちかづくること未だ期せず、
生別悲兮、	生別の悲しび、
夫復何言。	それまたいか言はむと。
臨紙悽断。	紙に臨みて悽断し、
奉状不備。	状を奉ること不備。
三月十五日、大伴宿禰池主	

意味は、こうです。

今月十四日に、深見村に参り、かの北方の御地を遥かに拜みました。絶えず、御徳を思うことは、いつの日にやむことでしょう。まして、御国のすぐ近くなので、ふっと慕情もひとしおに湧きいずるのを覚えました。その

上、先のお便りに、「三月の名残りは尽きず、いつの日に逢えるやもしれない、生き別れの悲しみを、どう表わしたらよいものか」とございました。紙を前にして、こころが痛み、乱文の罪をお許し下さいませ。

同族の相伴の池主が隣国の長官である家持に逢えないで書簡を手にし、これに返書を認め<sup>たま</sup>たのでしよう。二人の言い知れぬ心の情が素直に吐露されています。越前(福井・石川県)と越中(富山県)を結ぶ手紙の内容をもつてすれば、心惹かれる人にひよっとしたらもう逢えないかもしれない、だからせめて手紙だけでもと思い、今の自分の気持ちを伝えておきたいというのが池主の文意なのでしょう。今の私たちでも遠くはなれた人と再会する喜びは同じです。ただ、この書簡が漢文で表記され、その意味が現代の私たちにストレートに理會<sup>りかい</sup>しにくくなっているだけなのです。

では、万葉仮名で心情を表現した資料は歌でしか残っていないのでしょうか。奈良の東大寺正倉院に伝来する貴重な古文書が近年、写真本(八木書店刊行)で公開されました。そのなかに、数は多くないのですが、二点を紹介できます。正倉院仮名文書甲種・乙種の名称で登録されている書状です。

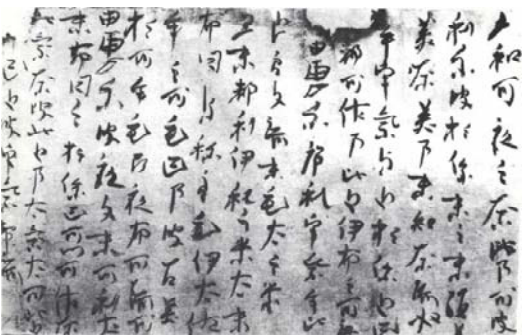
### 【甲種】

布彥止己呂乃己乃己呂乃美  
毛止乃加彥知支々彥末部尔彥  
天万都利阿久 之加毛与祢波  
夜末彥波彥万波須阿良牟  
伊比祢与久加蘇部天彥末不部之  
止乎知宇知良波伊知比尔惠  
比天美奈不之天阿利奈利(支氣波加之古之)  
一久呂都加乃伊祢波々古非天伎  
一田宇利万彥己祢波加須



### 【乙種】

和可夜之奈比乃可波  
利尔波於保末之末須  
美奈美乃末知奈流奴  
乎宇氣与止於保止己  
可都可佐乃比止伊布之加流  
可由惠尔序札宇氣牟比  
止良久流末毛太之米  
弓末都利伊札之米太末  
布日与祢良毛伊太佐



牟之加毛己乃波古美

於可牟毛阿夜布可流可

由惠尔波夜久末可利太

末布日之於保(止)己可川可佐奈

比氣奈波比止乃太氣太可比止

□己止波宇氣都流

ここに引用したのがその全文であります。これすべて漢字表記に見えるかもしれないが、実は漢字を音読みしていくことで日本語の表現がなされていることがわかります。これが「万葉仮名」であり、この日本語の音を表記した漢字が変体化して「かな文字」の表記法へと発展していくのです。それは「かな書き」の原点ともいうべき表記方法にほかなりません。

たとえば、「安」が「あ」、「以」が「い」、「宇」が「う」、「衣」が「え」、「遠」が「お」といったようにです。この一字一音節の真仮名による表記法が確立され、これを知った女人、子供にとっても文字が解読でき、かつ書記することができるようですから、自分の思いを伝える新たな手段方法が確立され、活用され、遠くで活らす人と人がこの表記法によって自身の心情を語りはじめた「手紙・書簡」が、先にも述べましたように現存する資料は少ないのですが、当時はかなり多く書かれたのではないかと推定することができます。ですが、紙は何よりも貴重なものでしたので、すべての人たちが読み書きしていたとは云いえない、上流階層者とその一族だけに限られたという推察立場も実際には領けるところでもあります。

そこで、数少ない【甲種】における手紙・書簡そのものの中身について眺めておくことにします。誰がどのような理由で書いたのでしょうか？

ふたところの このころの みもとの かたちききたまへに たてまつりあぐ。しかも よねは やまだは たまはず あらむ。いひね よくかぞへて たまふべし。とをちうちらは いちひに ゑひて みなふしてありなり (きけばかしこし)。(

- 一、くろつかのいねははこびてき。
- 一、田うりまだこねばかす。

この日本語の内容なのですが、本当のところ意味がはつきりとえられていない文脈がいくつか散在することもあるのです。いいかえれば、文章表現する具体的環境ともいえる「場面設定の状況」を、現代人の読み手に想起させる力が極めて乏しいものとなってしまっている文章なのかもしれません。また逆に、古代人の書き手の立場でいえば、今の世の中に生きる私たちこそがこのようないとも簡単な表現すら、もはや解読できない読解能力なのかと嘆くといったところなのでしょうか。それは計り知れない臆測の世界になってしまいがちですが、これ自体、謎の文字表現と化していることがいえます。次の【乙種】の文章の方は、記述しませんので是非ご自分の能力を発揮してお読みになって下さい。

\*参考図書：徳光久也著『上代日本文学史』(南雲堂・桜風社)

大野 透著『万葉仮名の研究』(明治書院)

## 「万葉仮名」の世界から見た五十音圖

ところで、漢字・漢語・漢文を少しずつ離れ、日本語で語り始めた私たち日本人にとって、実際にいくつの音が必要だったのでしょうか？前に学習しました五十音圖を手がかりに検討してみましょう。

あいうえお 安以宇衣於 アイウエオ 阿伊宇江於

かきくけこ	加幾久計己	カキクケコ	加幾久介己
さしすせそ	左之寸世曾	サシスセソ	サ之須世曾
たちつてと	太知川天止	タチツテト	多千川天止
なにぬねの	奈仁奴禰乃	ナニヌネノ	奈仁奴禰乃
はひふへほ	波比不部保	ハヒフヘホ	八比不部保
まみむめも	末美武女毛	マミムメモ	末三牟女毛
やいゆえよ	也 由 与	ヤイユエヨ	也 由 与
らりるれろ	良利留礼呂	ラリルレロ	良利流礼呂
わあうゑを	和為 惠遠	ワウウエヲ	和井 惠乎
ん	无		

これを「五十音図」といいます。ところで、これを眺めていて気が付いた方もおられるでしょう。ひらがなとカタカナとは、元になった漢字音の母体が異なる字があるということです。これはどういったことなのでしょう？

「仮名」という名称は、漢字を正式な文字と見なし、正当な文字とする意識から発生した名称です。漢字を講式の文字として「真名」と呼び、これに対し、非公式な文字を「かりな」すなわち、「仮名」と呼びました。この「かりな」が「かんな」となり、さらに撥音無表記の「かな」となったのです。この「な」は、文字という意味の語であり、これに「名」という文字を当てました。

「カタカナ」は、奈良時代八世紀に芽生え、九世紀により発達し用いられはじめます。古代の寺院では漢文で書記された經典の講義が日本語で取り行われ、受講生である若き僧侶たちは、師匠の解釈する要点を教科書である經典の行間により早く小さく書き込む(訓点を施す)ために、漢字の画数を減らし簡略な文字を必要としました。ですから、「カタカナ」で漢文を訓読する世界は寺院の僧侶という特殊な男性社会に始まりました。

古くは今よりもっと多くの異体字を用いていましたが、中世以降に整理され、江戸時代には現在の姿になったようです。実際は、明治三十三年の小学校令で確立をみました。

「ひらがな」も、漢字から生まれました。普通「女手」「女文字」といい、平安時代に確立された文字表記法です。実際に歌や手紙を書くときに用いられ、実用性よりはむしろ優雅で美的感覚を書に求めて行きます。そして、「ひらがな」という名称は江戸時代についていたものです。万葉仮名の草書体を簡略しつづけてなったものです。

このように、日本語の表記は、書記言語としては類を見ない漢字・カタカナ・ひらがなといった三種類の文字を併用し、あらゆる事象を文章に自由闊達に表現することになってきています。このことは、ある意味で世界に類を見ない、優れた文化現象として捉えることができます。日本語の豊かさや奥行きは書記言語に繁栄されてきた所以ではないでしょうか。

## (二)「上代特殊仮名遣い」なるものがあつた

奈良・平安時代初期には、仮名遣い表記が現代の表記法と異なつて存在していたという学説が「上代特殊仮名遣い」です。

「いきにけへめこそとのよろも」の十二文字に、二種類の漢字が使用され、これが別の音で発音できていたということです。この名残りがア行ヤ行ワ行の「いっえおゑを」です。

なぜ、この二種類に区別できていた音が消滅してしまったのでしょうか？

理由は、二つ考えられました。

(1)才列音が、唇音、舌音、軟口蓋音の順に消滅していった過程から推察して、唇音性の衰退が認められ、類別の消滅が徐々に進展していったと考える。

(2)語の多音節化の傾向が音韻類別の必要性を少なくしていったと考える。上代の一音節語が現代語では多音節に変化している。

【事例】阿(畔)↓あぜ 賀(鹿)↓しか 許(木)↓こずえ

## (二)あめつちの詞

平安時代初期に成立したものとみられるもので、同じ音節を重複しないで意味あることばで配列して口ずさみやすくしようとした意図がうかがえるものであります。

あめ(天) つち(地) ほし(星) そら(空)  
やま(山) かは(川) みね(峰) たに(谷)  
くも(雲) きり(霧) むろ(室) こけ(苔)  
ひと(人) いぬ(犬) うへ(上) すゑ(末)  
ゆわ(硫黄)さる(猿) おふ(負ふ)せよ(為よ)  
江の(榎の)衣を(枝を)なれ(馴れ)ゐて(居て)

この「あめつち」の詞は、『宇津保物語』国譲の巻にこの「あめつち」の詞の名が見え、『源順集』にこの詞をもとに、**杵冠歌**(杵と冠に同じ音をおくを披露しています。さらには、源順の弟子為憲の『口遊』(天祿元年＝九九〇)に収載され、ごく一般に流布していたものなのです。

この資料から、ア行ヤ行は別音で発音されていた事実を読み取ることができます。音節は、清音四十八、濁音二十の合計六十八音節となります。

## (三)たるにの歌

「あめつち」より、さらに口ずさみやすく表現したのが「たるにの歌」です。これも源為憲の『口遊』に収録されていて、今日知られるものです。

太為尔伊天 奈徒武和礼遠曾 支美女須土 安佐利於比由久  
也末之呂乃 宇知惠僖留古良 毛波保世与 衣不弥加計奴謂也供名文字  
田居に出て 菜摘む我をぞ 君召すと 漁り追ひゆく  
山城の うち酔へる子ら 藻葉乾せよ え舟繫けぬ

ここでは、既に「え」が一つなのでア行ヤ行の音節による区別が失われていると考えられています。

## (四)いろはの歌

「たるにの歌」が五七調に対して、七五調になったのが「いろは歌」です。この歌には多くの謎が潜んでいて、現代人の私たちに向けて何か意思あるメッセージをだしつつづけているようです。

いろはにほへと 色は匂へど  
ちりぬるをわか 散ぬるを 我が  
よたれそつねな 世誰ぞ 常な  
らむうゑのおく らむ 有為の奥  
やまけふこえて 山今日越えて  
あさきゆめみし 浅き夢見じ  
ゑひもせず 酔ひもせず



高野山に行きますと、この「いろは歌」が石に刻まれていて「弘法大師空海」の作とみなさん信じておられます。ですが、この歌は空海自身が生きていた時代とはやややずれています。当代のスーパースターである空海というブランド名が役に立っていることが伺えます。そして、最古の「いろは歌」は、『金光明最勝王経音義』承暦三年（一〇七九）に見え、万葉仮名でなぜか七行七列で書かれています。

この「いろは歌」は呪文のようにして、唱えられ、今日に至ったのは僧侶たちの世界と貴族を結ぶパイプラインのように保たれ、やがては武士、そして庶民へと広く流布した点に大きな特徴があるようです。

この歌の持つ呪縛性・神祕性をそれぞれの時代を生きる人々とその歴史のなかでつくく感じます。その一つが脚韻にひそむことば「とがなくてしす」です。江戸時代の赤穂浪士の仇討ちがありました。主君の仇をとる話ですが、吉良邸に討入りした義士の数はなぜか「いろは歌」の数と同じ四十七人でした。

### (五)五十音図

現代の五十音図とは異なりますが、平安中期の寛弘から万寿年間に成立した『孔雀経音義』の末尾が最古の音図としてあります。



呷キコカケク

四シサセス

知チトタテツ

已イヨヤ

味ミモマム

比ヒホヘン

利リロラレル

※ア行ナ行を欠落した八行だけを記載する。その理由は明確ではない。

補注

『日本霊異記』参考hpは、[http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/kokugo\\_nihonreiki05.html](http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/kokugo_nihonreiki05.html)に収載してあります。

『宇津保物語』は、京都大学附属図書館所蔵 奈良絵本コレクション [宇津保物語] (一般貴重書・86855・04・30/ウ/01貴)が公開されている。活字本としては、岩波の日本古典文学大系と宇津保物語 全訳注、講談社学術文庫、上坂 信男 (翻訳)・神作 光一 (翻訳)がある。hpでは、『うつほ物語』総合研究文献目録Ⅰ 単行本編が参考となる。

馬淵和夫『五十音図の話』(大修館書店、一九九三年刊)

コラム 奈良絵本

広島大学所蔵奈良絵本・室町時代物語

白百合女子大学図書館蔵奈良絵本

國學院大學図書館蔵奈良絵本

九州大学図書館蔵奈良絵本

龍谷大学図書館蔵奈良絵本

国際日本文化研究センター蔵奈良絵本

京都大学図書館蔵奈良絵本

## 《補足資料》

## ☆乙種の読み方

我が養ひの代りには、おほまします南の町なる奴を受けよと大徳が司の人言ふ。しかるが故に、それ受けむ人ら車持たしめてまつりいれしめ給ふ日、米らも出さむ。しかもこのはこみおかむも危ふかるが故に、早く退り給ふべし。大徳が司なひけなはひとのたけたかひとぞ事は受けつる。

## ★解説

当方が出す穀物の代りに、あなたがおられる南の町の奴を請求しなさいと大徳が司の人が言います。それで、それを請求します。人々に車を持たせて(奴)をお納めくださる日に、米も出しましょう。しかも、この櫃を放置しておくのも危険ですから、早くお運び下さい。大徳が司の「なひけなはひと」の長上が請求します。

## \*二つの漢語翻訳表現

「やしなひ」は、**観智院本『類聚名義抄』**に「穀俗ヤシナフ イケルトキ モミ」「僧中67①」とあつて「穀物」の意と解釈できます。この書簡は、穀物(米)と奴との交換を提示した時ものと見られます。また、「まつりいれしめ給ふ」は、「物を納める」意の漢語「進納」の翻訳敬意表現となります。

甲種の文面にも「たてまつりあぐ」といった「進上」の漢語翻訳による敬意表現が見えました。話題を転ずる表現「さて」にあたるのが「然」しかもです。奈良時代の書簡を分析してみても理解できたことは、中国書簡表現の翻訳表現が主であることからして、庶民の感情をそのまま吐露するような暮らしのことは反映されていないのではないかという素朴な疑問です。

※中国にも類似譚はないかと調べてみますに、東晉の時、後秦と云う國に、竇滔という人詔によつて流沙に下り、北辺を守り、年を累ね帰ることがありませんでした。故郷の妻蘇惠、夫を思慕し、懇切の情を詩に作り、錦の文に織りて、有司に献上し、この有司は、これを國王に呈し、後秦の王符堅は、其の文を讀まして深く哀憐、彼の夫を辺塞より召し歸されたとあります。この詩文を『織錦回文詩』と云います。これは、婦人が夫に送るだけではなく、その上司に書いた詩です。如何でしょうか？





『茶まめ』による語彙の自動解析

当該語	読み	書記	漢字表記	品詞	活用段	活用形
妻	ツマ	ツマ	妻	名詞・普通名詞・一般		
から	カラ	カラ	から	助詞・格助詞		
の	ノ	ノ	の	助詞・格助詞		
手紙	テガミ	テガミ	手紙	名詞・普通名詞・一般		
が残っ	ノコツ	ノコル	残る	動詞・一般	五段・ラ行・一般	連用形・促音便
て	テ	テ	て	助詞・接続助詞		
いれ	イレ	イル	居る	動詞・非自立可能	上一段・ア行	仮定形・一般
ば	バ	バル	ば	助詞・接続助詞		
、			、	補助記号・読点		
此の	コノ	コノ	此の	連体詞		
事件	ジケン	ジケン	事件	名詞・普通名詞・一般		
の	ノ	ノ	の	助詞・格助詞		
顛末	テンマツ	テンマツ	顛末	名詞・普通名詞・一般		
は	ワ	ハ	は	助詞・係助詞		
方向	ホーコー	ホウコウ	方向	名詞・普通名詞・一般		
性	セイ	セイ	性	接尾辞・名詞的・一般		
を	オ	ヲ	を	助詞・格助詞		

変え	カエ	カエル	変える	動詞・一般	下一段・ア行	連用形・一般
て	テ	テ	て	助詞・接続助詞		
い	イ	イル	居る	動詞・非自立可能	上一段・ア行	連用形・一般
た	タ	タ	た	助動詞	助動詞・タ	基本形・一般
か	カ	カ	か	助詞・副助詞		
も	モ	モ	も	助詞・係助詞		
しれ	シレ	シレル	知れる	動詞・一般	下一段・ラ行・一般	連用形・一般
ませ	マセ	マス	ます	助動詞	助動詞・マス	未然形・一般
ん	ン	ヌ	ぬ	助動詞	助動詞・ヌ	基本形・撥音便
°			°	補助記号・句点		
です	デス	デス	です	助動詞	助動詞・デス	基本形・一般
、			、	補助記号・読点		
悪逆	アクギヤク	アクギヤク	悪逆	名詞・普通名詞・一般		
の	ノ	ノ	の	助詞・格助詞		
天罰	テンバツ	テンバツ	天罰	名詞・普通名詞・一般		
を	ヲ	ヲ	を	助詞・格助詞		
受け	ウケ	ウケル	受ける	動詞・一般	下一段・力行	連用形・一般
た	タ	タ	た	助動詞	助動詞・タ	基本形・一般
の	ノ	ノ	の	助詞・準体助詞		
は	ハ	ハ	は	助詞・係助詞		

故郷	。	ます	なり	と	こと	する	苦悶	もつと	、	は	刀自	母	た	生き残っ	、	そして	。	です	一人	彼
コキョー		マス	ナリ	ト	コト	スル	クモン	モット		ワ	トジ	ハハ	タ	イキノコツ		ソシテ		デス	ヒトリ	カレ
コキョウ		マス	ナル	ト	コト	スル	クモン	モット		ハ	トジ	ハハ	タ	イキノコル		ソシテ		デス	ヒトリ	カレ
故郷	。	ます	成る	と	事	為る	苦悶	もつと	、	は	刀自	母	た	生き残る	、	そして	。	です	一人	彼
名詞	補助記号	助動詞	動詞	助詞	名詞	動詞	名詞	副詞	補助記号	助詞	名詞	名詞	助動詞	動詞	補助記号	接続詞	補助記号	助動詞	名詞	代名詞
名詞	普通名詞	普通名詞	非自立可能	格助詞	普通名詞	非自立可能	普通名詞	普通名詞	普通名詞	係助詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞
		助動詞	五段			サ行							助動詞	五段				助動詞		
		基本形	連用形			基本形							基本形	連用形				基本形		

なっ	どう	は	関係	の	と	妻	の	麻呂	火	子	その	と	母	た	持ち帰っ	を	遺髪	の	子	に
ナッ	ドー	ワ	カンケ	ノ	ト	ツマ	ノ	マロ	ヒ	コ	ソノ	ト	ハハ	タ	モチカエツ	オ	イハツ	ノ	コ	ニ
ナル	ドウ	ハ	カンケイ	ノ	ト	ツマ	ノ	マロ	ヒ	コ	ソノ	ト	ハハ	タ	モチカエル	ヲ	イハツ	ノ	コ	ニ
成る	どう	は	関係	の	と	妻	の	麻呂	火	子	其の	と	母	た	持ち帰る	を	遺髪	の	子	に
動詞	副詞	助詞	名詞	助詞	助詞	名詞	助詞	代名詞	名詞	名詞	連体詞	助詞	名詞	助動詞	動詞	助詞	名詞	助詞	名詞	助詞
動詞	非自立可能	係助詞	普通名詞	格助詞	格助詞	普通名詞	格助詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	格助詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞	普通名詞
													助動詞	五段						
													基本形	連用形						

そこ	。	です	の	ない	い	て	れ	語ら	も	何	は	て	つい	に	妻	？	し	で	の	た
ソコ		デス	ノ	ナイ	イ	テ	レ	カタラ	モ	ナン	ワ	テ	ツイ	ニ	ツマ		シヨ	デ	ノ	タ
ソコ		デス	ノ	ナイ	イル	テ	レル	カタル	モ	ナニ	ハ	テ	ツク	ニ	ツマ		スル	デ	ノ	タ
其処	。	です	の	ない	居る	て	れる	語る	も	何	は	て	就く	に	妻	？	為る	で	の	た
代名詞	補助記号   句点	助動詞	助詞   準体助詞	助動詞	助詞   非自立可能	助詞   接続助詞	助動詞	助詞   一般	助詞   係助詞	代名詞	助詞   係助詞	助詞   接続助詞	助詞   一般	助詞   格助詞	名詞   普通名詞   一般	補助記号   句点	助詞   非自立可能	助詞   格助詞	助詞   準体助詞	助動詞
		助動詞   デス		助動詞   ナイ	上一段   ア行		下一段   ラ行   一般	五段   ラ行   一般					五段   カ行   一般				サ行変格			助動詞   タ
		基本形   一般		基本形   一般	未然形   一般		連用形   一般	未然形   一般					連用形   イ音便				意志推量形			基本形   一般

よう	どの	が	書簡	・	手紙	ある	で	言語	文字	の	時代		奈良	伝える	を	感情	の	個人	、	で	
ヨ	ドノ	ガ	シヨカン		テガミ	アル	デ	ゲンゴ	モジ	ノ	ジダイ		ナラ	ツタエル	オ	カンジョ	ノ	コジン		デ	
ヨウ	ドノ	ガ	シヨカン		テガミ	アル	ダ	ゲンゴ	モジ	ノ	ジダイ		ナラ	ツタエル	ヲ	カンジョウ	ノ	コジン		デ	
様	何の	が	書簡	・	手紙	有る	だ	言語	文字	の	時代		奈良	伝える	を	感情	の	個人	、	で	
形状詞   助動詞語幹	連体詞	助詞   格助詞	名詞   普通名詞   一般	補助記号   一般	名詞   普通名詞   一般	助詞   非自立可能	助動詞	名詞   普通名詞   一般	名詞   普通名詞   一般	助詞   格助詞	名詞   普通名詞   一般	一般	名詞   固有名詞   地名   一般	動詞   一般	助詞   格助詞	名詞   普通名詞   一般	助詞   格助詞	名詞   普通名詞   一般	補助記号   読点	助詞   格助詞	
						五段   ラ行   一般	助動詞   タ						下一段   ア行								
						基本形   一般	連用形   一般						基本形   一般								

。ます	き	て	なっ	と	必要	が	手がかり	知る	を	か	の	た	あつ	で	もの	な	
マス	キ	テ	ナッ	ト	ヒツヨ	ガ	テガカリ	シル	オ	カ	ノ	タ	アッ	デ	モノ	ナ	
マス	クル	テ	ナル	ト	ヒツヨウ	ガ	テガカリ	シル	ヲ	カ	ノ	タ	アル	ダ	モノ	ダ	
。ます	来る	て	成る	と	必要	が	手掛かり	知る	を	か	の	た	有る	だ	物	だ	
補助記号・句点	助動詞	動詞・非自立可能	助詞・接続助詞	動詞・非自立可能	助詞・格助詞	能	名詞・普通名詞・形状詞可	助詞・格助詞	名詞・普通名詞・一般	動詞・一般	助詞・格助詞	助詞・副助詞	助詞・準体助詞	動詞・非自立可能	助動詞	名詞・普通名詞・一般	助動詞
	助動詞・マス	力行変格		五段・ラ行・一般						五段・ラ行・一般			助動詞・タ	五段・ラ行・一般	助動詞・ダ		助動詞・ダ
	基本形・一般	連用形・一般		連用形・促音便						基本形・一般			基本形・一般	連用形・促音便	連用形・一般		連体形・一般